CAP2018

外からの視点と CAP2018

玉澤春史（京都大学／京都市立芸術大学）

1. はじめに

CAP2018 は天文系科学コミュニケーションの国際会議であり、どのように外部の人々に天文を伝えるか、といった内容について、いろんな背景をもつ人々が一堂にあつまって議論するまたとない機会であった。一方で見方を変えれば「天文系科学コミュニケーションに携わる様々な人々」という巨大な一集団の会合であり、そこで「外」の目を意識することは少なかったかもしれない。

本稿では、CAP2018 の発表内容の紹介も含め、CAP2018 で見聞きしたことから、主に「外からの視点」を意識した内容に絞って報告する。

2. 参加から発表へ

2.1 参加「すべきか」

そもそも CAP2018 に参加しようかどうか、大分迷った。様々な人から聞こえてくる過去の CAP の参加者は、ほとんどが天文・宇宙が好きで伝えることも好きであったり使命感を持っていたりする人々である。「自分の好きなものは人も好きになるに違いない」というのは圧力に感じる人もいる。発信側は完全に善意・使命感でやっているため、そこにある谷は深い。一種の同調圧力にどう抗うかが自らの活動の軸であったりしているのだ。

様々な外因もあり、「ターゲットを明確にすることで、あくまで相手の興味のある分野に寄り添うことが重要である」ことを発表の軸に据えれば意義はあるかもしれないと思うようになり、参加することにした。

どのターゲットに向けた活動に関して発表するかというのを考えた結果、研究でも積極的に行っている歴史（を好きな人々）をターゲットにした活動にすることにした。

2.2 発表の場

今回の国際会議では国内の会議以上に実践に関する内容が予想されたので、単にスライドだけでは実感が伴わないだろうという思い、共著者である武庫川女子大学の株本氏から所蔵する江戸時代の望遠鏡をお借りし、講演の時に実物を見せるということをした。玉澤や株本氏がだした江戸期望遠鏡関連の論文の宣伝[1][2]も兼ねていたが、活動では江戸期望遠鏡を使ってみる、ということをしており、会議の場もアウトリーチの場であるなら、そこでも実体験・実物があるほうが効果的では、という狙いもあった。

当日は歴史関係のネタで話す人もそんなにいないだろう、と思っていたのだが、同じセッションの最初の発表者が「historical document」なる単語を発するなど、似たようなアプローチを考える人はいるようである。

発表では上記のような活動の他、研究も行っているということで受理された論文[3]を使って「ApJL（The Astrophysical Journal Letters）でも漢字が使えるということがわかりました。このような論文もアウトリーチの道具の一つです」というようなことをいったのだが、講演後の質問ではその論文についての質問であった。よく考えてみれば研究者も多数参加しているのであり、アカデミックな発表があればそれに対する質問もあるはずである。

飛び道具的に望遠鏡を見せたのだが、あとから撮影をしていたり、それを Twitter 上でつぶやいていたりした方がいたりと、多少の反応はあったようである。やはり実物の感触

というのは大きいのである。

「外からの視点」というのを発表準備として意識したことは、発表よりも聴講を選ぶセッションである。普段は聞きにいかないであろう「開発のための天文」関連のセッションに出席し質問したのは、後から振り返ると準備段階で視点をどこにするか考えたことが影響しているようである。

3. 観望会での一コマ

会議初日の夜は public event として観望会が行われたが，この際公式の望遠鏡分に紛れて借りてきた江戸時代の望遠鏡で月などを見つつ、参加者にも実際に見てもらった。貴重な望遠鏡であるので、一人で対応するのは難しいため、知人にアシスタントとして協力してもらった。この知人は天文・宇宙業界とは関係ないが、日程が空いていたのでこころよく引き受けていただいた。

会場にて手伝っていただいた方と待ち合わせをしていたのだが、それらしき人が見えない。しばらくすると携帯電話の SMS へ連絡が入った。

「雰囲気が天文しすぎて入りにくい」

本人の名誉のためにいっておくと、極めて社交的な人物である。そのような人物でも、自分の所属する分野以外の集まりを見たときはそう思うであろう、と後日語っていたが、一般向けとして行っているイベントについて、そのように思われうるということを端的に示す出来事であり、会議に参加し忘れていた視点を見直す非常に良い機会となった。

話はここで終わらない。観望会の最中、国際宇宙ステーション（ISS）が上空に見えるタイミングがあり、誰かからの「手を振ってみましょう」というコメントから、参加者が ISS に向けて手を振り呼びかける、という光景があった。この光景を現場で当該の方も見ていたのだが、あとから聞いてみると、一斉に空に向けて手を振って呼びかけている光景は衝撃的だったという。玉澤自身は自分で手を振らないまでも特に不自然に思っていなかったのだが、冷静になって考えてみると、ある集団が一斉に空に向かって手を振る、というのは外から見れば異様だったかもしれない。善悪、快不快とはまた別の観点で、外部との視点を思い出させる機会となった。

4. おわりに

宇宙・天文の科学コミュニケーションに関する国際会議ということで、会議本体にはほぼフルで参加し、いろいろ情報を得ることができ、非常に有意義であった。

その裏で、本来の目的である「外とのコミュニケーション」に関しても気づきがあった。同じような価値観の人々が多数集まったところにいると、普段の感じる違和感も持たなくなる。これにどうやって抗い、外からの視点を如何に持ち続けるか。今後の課題として浮き彫りになった点である。

文　献

[1] Tamazawa H., Hayakawa H., Iwahashi K.（2017）'Astronomy and Intellectual Networks in the late 18th Century in Japan: A Case Study of Fushimi in Yamashiro', Historia Scientiarum, **Vol. 26, No. 3**, pp. 172-191

[2] 株本訓久（2018）「岩橋善兵衛の八稜筒形望遠鏡の発見」, 科学史研究.[第 III 期], **Vol. 57, No. 285**, pp. 20-36

[3] Hayakawa H. et al.（2017）'Long-lasting extreme magnetic storm activities in 1770 found in historical documents', ApJL, **850**：L31

玉澤　春史